

略 歴

2009年 3月	立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科 博士前期課程 修了
2015年 9月	立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科 博士後期課程 修了
2016年 5月	金沢大学 地域連携推進センター 教務補佐員
2016年 7月	金沢大学 地域連携推進センター 連携研究員 現在に至る

農耕祭礼における地域アイデンティティとしての行事食

戦後、日本を経済的にも精神的に立て直すため、官民あげて国民に対し、新生活運動を推進し、冠婚葬祭の自粛が唱えられた。この過程において、祭礼の自粛改善が要求された地域がある。当時の地域住民にとって、伝統の祭礼の継承とは、地方文化の形成においてどのような意味を持ったのか。本研究は、祭礼の行事食（以下、方言で「ごっつお」と記す）に焦点をあて、祭礼の自粛が要請されてもなお、地域文化の継承としての意味づけを守り続けた地域住民のアイデンティティを問う試みを行った。

アイデンティティについて、エリク・エリクソンは、「自我のさまざまな総合方法に与えられた自己の同一と連続性が存在するという事実と、これらの総合方法が同時に他者に対して自己がもつ意味の同一と連続性を保証する働きをしているという事実の自覚」（エリクソン 1973）と定義している。つまり、「自分が何者であるかの確信」「その自分が他者から承認され受け入れられているという確信」が創発されるときに、アイデンティティが確立するとみる。

そこで、本研究では、「ごっつおとは、人びとの共通の象徴であり、自己のアイデンティティを確認する機能があるのではないか」との仮説に基づき、アイデンティティの確認要求の態度がごっつおに係る一連の過程でどう活性化されていくのかを研究の問題軸として、論を進めた。

本稿では、この試みを遂行するため、石川県珠洲市で100年以上にわたり継承されているキリコ祭りの行事食を対象事例として研究を進めた。その際、戦後（昭和20年代～30年代）のごっつおの状況を知る地域住民に対し、聞き取り調査とアンケート調査を行った。これらと並行して市史、自治体の広報誌、地域新聞等の文献調査を行った。

自治体の広報誌や地域新聞によれば、戦後、珠洲市で提唱されたのが、「祭礼の自粛要請」である。その内容は、祭礼に日の朝に配る①赤飯配りの廃止、②近親者にとどめる饗応（方言で「ヨバレ」）の招待、饗応の席での③酒のふるまいの制限（「一人一合まで」）、客人にふるまう膳については

④つまみ程度のもてなし（3品以内）——の4項目の改善が再三にわたり、呼びかけられた。これらは、全て「ごっつお」に関することである。

しかし、聞き取り調査とアンケート調査の結果、地域住民は、4項目の自粛要請全てにおいて、抗っていたことが分かった。例えば、①の赤飯配りには、祭礼の日に客人を迎えるといった本来の意味だけではなく、先祖や地域への紐帯の意味があった。②においては、100名近い客人を招いていたとの証言もあった。③については、一人一合を守った人はいないとの証言が聞き取り対象者の全員から得られた。④については、本膳と二の膳を合わせて11種類もの椀でごっつおが提供されていることが分かった。ごっつおは、地域住民の象徴であり、地域アイデンティティが創発されたとみて良い。

一方で、戦後の珠洲市が、婦人の多大な労務の負担から女性を解放しようとの意図で「祭礼の自粛要請」が提唱されていることが分かった。そして、この要請に対する地元女性たちの意想外の反応の諸相（不同意、あるいは無視）を分析することを通して、「牛馬」の如く働いている女性と称された当時の女性たちが、一転、行政の提唱する祭礼の自粛要請に対して、強く抗い、「ごっつお」を作り続けたことが分かった。この過程からは、ジェンダーアイデンティティが創発されたとみて良い。

このように、本研究からは、地域アイデンティティとジェンダーアイデンティティの2つのアイデンティティが創発されたことが分かった。

1. はじめに

GHQの強い意向によって昭和23年に農業改良助長法が制定されると、新政府は西洋における簡素化・合理化運動を日本で採用する目的で生活改善普及事業を実行した。当時の農林省には、住生活・衣生活・家庭管理等の部門が設置され、冠婚葬祭の簡素化・合理化の思想の向上が目指された。

この過程において、祭礼の自粛改善が要求された地域がある。当時の地域住民にとって、伝統の祭礼の継承とは、地方文化の形成においてどのような意味を持ったのか。本研究は、祭礼の行事食に焦点をあて、祭礼の自粛が要請されてもなお、地域文化の継承としての意味づけを守り続けた地域住民のアイデンティティを問う試みである。

2. 研究の目的

本研究は、昭和20年代後半から30年代の石川県珠洲市が提唱した伝統の農耕祭礼「キリコ祭り」の自粛改善要請に対し、地域アイデンティティの確認欲求の態度としての行事食（以下、方言の「ごっつお」（写真1）と記す）を検証することを目的とする。ごっつおを介して、地域社会の人々が何らかの意味を喚起し、機能する過程を考察する。その上で、地域社会についての住民の語りや、記憶の結合の接点をごっつおに見つけ、地域住民とごっつおとの関係性を解明する。



写真1 ごっつお

3. 研究方法

1) 調査の方法

研究にあたっては、当時を知る現在70代、80代の住民を中心に、親世代が行っていたごっつおの記憶、あるいは、自身のごっつおに関わる状況について、オーラルヒストリーの手法による聞き取り調査とアンケート調査を行った。聞き取り調査では22名、アンケート調査では21名の住民から回答を得た。これらと併せて文献調査を実施した。

2) 調査対象

本研究は、能登半島北部の石川県珠洲市において江戸時代から毎年、秋に行われている、伝統の農耕祭礼「キリコ祭り」で提供される行事食ごっつおを事例とする。



写真2 ヨバレ

キリコ祭りの日は、早朝から赤飯を炊き、親戚や友人に対し、祭りへの招待を意味する「赤飯配り」をすることで始まる。電話などの伝達手段が浸透していない時代から、現在も続いている慣習である。夕方になると、キリコの山車を見物するためのヨバレ（写真2）と呼ばれる饗応が始まり、主人は深夜まで客人を接待する。そのヨバレの席で提供されるのが、御馳走を意味するごっつおである。ごっつおは、本膳と二の膳で提供され、伝統の輪島塗の椀で配膳される。

本来は、祭りの数日前から家庭の主婦がごっつおを手作りして客人に振舞うのが慣わしであるが、現在では、作り手も少なくなり、仕出し屋からごっつおを注文するスタイルになっている。

3) アイデンティティとは

伝統の祭礼で振舞われるごっつおが、人々のアイデンティティの確認欲求の態度という立場にあるならば、アイデンティティとは何か、ここで確認をしておきたい。

アイデンティティについて、エリク・エリクソンは、「自我のさまざまな総合方法に与えられた自己の同一と連続性が存在するという事実と、これらの総合方法が同時に他者に対して自己がもつ意味の同一と連続性を保証する働きをしているという事実の自覚」（エリクソン1973）と定義している。つまり、エリクソンは、次の2点が持てるときにアイデンティティが確立されるとみる。まず1点めは、自分が何者であるかの確信。2点めが、その自分が他者から承認され受け入れられているという確信——である。

そこで、本研究では、「ごっつおとは、人びとの共通の象徴であり、自己のアイデンティティを確認する機能となる」との仮説に基づき、アイデンティティの確認要求の態度がごっつおに係る一連の過程でどう活性化されていくのかを研究の問題軸として、論を進めていく。

4) 本研究のキーワード

次に、当時のごっつおがどのような要素から構成されており、さらにどのような構造を持っているのかを検討するため、本研究では2つのキーワードを設定した。

まず1つ目のキーワードが、戦後、石川県珠洲市で展開した、「4項目の祭礼の自粛改善要請」

である。この4項目については、全て、ごっつおに関係した自粛事項であったことが、当時の広報誌や地域新聞から分かった。2つ目のキーワードが、「農村社会と女性の役割」である。これらのキーワードは、祭礼自粛要請の名のもとに行われた施策において、「アイデンティティ」というテーマを考える上で、有用な手がかりを提供するものと考えられる。

4-1) 4項目の祭礼の自粛改善要請

戦後、日本を経済的にも精神的に立て直すため、官民あげて国民に対し、新生活運動を推進し、冠婚葬祭の自粛が唱えられた。昭和20年代後半から30年代にかけての地域社会形成の時期に、石川県珠洲市で要請されたのが「祭礼の自粛改善」である。珠洲市の広報誌によれば、①赤飯配りの廃止、②近親者にとどめるヨバレの招待、③酒のふるまい(「一人一合まで」)、④つまみ程度のもてなし(3品以内)、等の項目が昭和20年代から30年代にかけて再三にわたり、呼びかけられた。

例えば、昭和30年8月1日号の「広報すず」には、祭礼の自粛改善運動によって、一戸平均約2000円の節減がみられたとの内容を掲載している(写真3)。昭和31年7月15日発行の広報誌には、「明るい生活をするために」との見出しに続けて、「赤飯配りは止めましょう。お酒は一人一合まで。料理はつまみ程度に簡素にしましょう」との内容が掲載されている。また、昭和27年に開催された珠洲市社会教育大会では、「無駄遣いの習わしを改めて、経費をかけずに祭りを楽しもう」という申し合わせがなされている。つまり、祭りのごっつおは、虚礼や見栄、あるいは冗費とみなされてきたのである。当時、生活改善同盟員であった民俗学研究者の今和次郎は、祭りについて「普通に飲み食いする行事、神様仏様のことだからと伝統を重んずるべきならば、国を滅ぼすことになる」(今1990)と断じた。

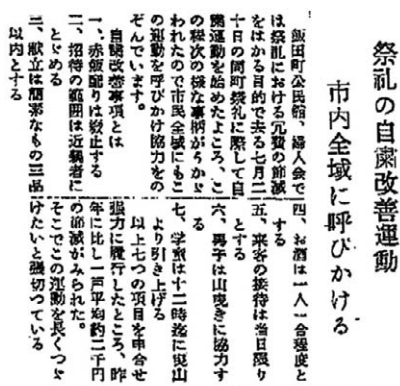


写真3 『広報すず』昭和30年8月1日号

もっとも、生活改善の一環として地域住民に呼びかけられた祭礼の自粛要請については、2つの問題が隠れている。1つ目は、自粛すべきとされた冠婚葬祭の「祭」は、葬送を意味し「祭礼」を意味しない点である(神崎2005)。2つ目は、「祀る」を語源に持つ祭りは、貧しさの克服を祈願する五穀豊穡の意味があるため、戦後、貧しさからの脱却を目指す政府にとって、祭礼の継承を支援しこそすれ、自粛の対象とするには矛盾する点である。これらの問題を含みながらも、戦後は、祭礼日を統一する合理化策を唱えた地域は岐阜県高山市(高山祭り)、岐阜県飛騨市(古川祭り)など全国的に存在した。だが、祭りの行事食の自粛改善を唱えた地域は、管見に触れた限り、石川県珠洲市(キリコ祭り)のみである。

4-2) 農村社会と女性

2つめのキーワードが「農村社会と女性」である。昭和5年当時の本業農業人口の割合によると、全国の女性の農業従事者の割合が45%に対し、石川県の女性の農業比率は48%であり、全国平均よりもやや高い傾向が見受けられる。だが、この結果を受けて、直ちに石川県の女性の農業従事者の割合が約半数であるとは言いきれない。それは、石川県が半農半漁、半農半林といった就業体系を特徴とする地域であるためであり、実際の女性の農業従事者は半数をはるかに超えることが

予想されるからである。さらに、それだけで当時の石川県の女性が自立していたとはみなすことは出来ない。それが証拠に、昭和32年の『珠洲市社会教育の概要』には、主婦については「毎日の生活になんのうるほいもなく、全く牛馬のように働いているのではないか」(珠洲市1957:140)と論じられている状況である。このような中、昭和37年5月1日発行の広報誌では、「祭礼がなぜ改善されなければならないのか…何をいってもお客様をもてなす費用の節減と、それにとまなう婦人の軽減」との文面が紙面上で記載されていった。女性、特に主婦にとって、祭りの季節、祭りの数日前からごっつおの仕込みが始まっても、農村婦人に農作業が軽減される余地はない。ここに、農村婦人の多大な労務の負担から女性を解放しようとの意図から、ごっつおでのもてなしの自粛改善要請がなされたことが伺える。

4. 考 察

前章の2つのキータームに即して考察することにより、祭礼で提供されるごっつおの簡素化要求と、地域住民がどのように向き合ったのかについて多面的に捉えることが可能となる。そこで、本章では、1点目のキータームである「祭礼の自粛改善要請の4項目」を縦軸に、そして、2点目のキータームである「農村社会と女性」を横軸にとり、調査の結果を述べていく。

1) 赤飯配りの禁止

まず、「赤飯配り」についてである。聞き取り調査によれば、昭和20年代後半から30年代、赤飯配りを廃止したと答えた家庭はなかった。それは、赤飯配りに「今日、祭りに来てください」というヨバレの伝達手段の役割があるだけではない。例えば、赤飯を配ろうとする相手に「御不幸があつて、祭りに来られないであろう人にも、赤飯を味わってもらうために配った」(Aさん)という証言もある。また、「嫁に出した娘の立場では祭り見物のために実家に戻って来られないならば、せめて母の味を届けたい」(Bさん)として配ったという、母親の思いが込められた行為でもあった。さらに、「神様や仏様に供えなきゃならない」(Bさん)といった先祖への礼儀の意味も赤飯配りには込められていた。

つまり、赤飯配りには、地域や先祖と赤飯でつながってはじめて、義理が果たせるという意味が読み取れる。ここに、先にみた今和次郎が「神様仏様のことと伝統を重んずるべきならば、国を滅ぼすことになる」(今1990)として戦後の祭りを断じた点との大きな差異が見えてくる。

2) 近親者にとどめるヨバレの招待

次が「近親者にとどめるヨバレの招待」である。聞き取り調査によれば、戦前から商売をしていた家庭では、祭り見物に招く客人が多い傾向にあった。実家が大工のCさんは、「施主とその家族をヨバレに呼んでいたもんで毎年、50人は来客があつたよ」と言う。また、Dさんは、客人を招くため、「どんなに貧しくても膳を揃えることが所帯を持つことだといって、輪島塗の御膳を父が揃えました」と証言している。続けてDさんは、戦後の貧しい時代、ごっつおを楽しみにしている子供のため、母親が、「せめて子供だけでもごっつおを腹一杯食べるべきだ」との理由から、ヨバレに行かせてくれたと証言する。

一方、昭和35年の婦人会調べによるヨバレ客に関するデータによると平均で、12名の客人が来訪したことになる(表1)。しかし、筆者が、この結果を元に住民に対して聞き取り調査を行ったところ、多くの異議が聞かれた。これについては、生活改善普及事業を推奨した婦人会による調査データ

であることが大いに関係していると思われる。実際、筆者が行った聞き取り調査では、ヨバレについては、約65%の家庭で自粛はしなかったと答えている。自粛したと答えた住民でも、「戦争で親を亡くしたから」(Eさん)との理由であり、積極的に祭礼の自粛を推進したわけではないことも分かった。聞き取り調査では、当時、最高で、100近くの客人を招いたとの証言があったが、平均では、30名近くの客人をヨバレに招いていた。このように聞き取り調査では、当時の婦人会の調べた結果とは、異なる事情が見えてきた。

客人に提供する御膳は、自粛したと答えた人も含め、全家庭で輪島塗の朱色の膳を揃えていた。最低でも10脚、多い家では、40脚もの御膳を購入していた。輪島塗の膳は、高価であるため、その購入にあたっては、「ゑえ」と呼ばれる講を組織して椀を購入したという証言が多く得られた。

上戸地区	昭和35年 総人数 (人)	昭和35年 一戸あたり (人)
総人数 (大人/小人)	3,044(1,927/1,117)	11.9 (7.5/4.4)
親戚 (大人/小人)	2,127(1,199/928)	8.3 (4.7/3.6)
他人 (大人/小人)	691 (572/119)	2.7 (2.2/0.5)
飛入り (大人/小人)	169 (156/13)	0.6 (0.6/0.0)
その他	57	0.2
宿泊数	415	1.7

表1 昭和35年度 珠洲市上戸婦人会による調査

(『珠洲市社会教育の手引—昭和35年度』より筆者作表)

3) 酒のふるまい

次に、酒のふるまいについて「一人一合まで」との制限を課した祭礼の自粛要請についてみていく。表2の婦人会調べのデータでは、一戸あたり平均で2.4升の酒を提供していることになる。この2.4升を、表1でみた一戸当たりの平均客人数11.9名で割ると、一人あたり2合の酒を提供していた結果になる。しかしながら、住民に「2合」程度を客人に振舞ったかを確認したところ、「2合なんてなんて少ない量ではなかった」(Fさん他)との声が多数を占めた。

	昭和35年(%)	平均額(円)	最高(円)	最低(円)
料理関連総額	82%	4,719	16,375	928
料理 (品数)	47%(7.7品)	2,706	10,305 (12品)	630 (4品)
酒類・金額 (量)	22%	1,263(2.4升)	6,070	150
赤飯・金額 (量)	13%	750(5.2升)	2,175	165
器物	4.70%	267	5,500	100
衣料,化粧他	4%	267	4,000	100
小遣い	2.60%	148	2,200	40
宮,曳山経費	5.70%	329	1,370	180
その他	1%	59	3,500	30
計	100%	5,775	17,275	968

表2 昭和35年度 珠洲市上戸婦人会による調査

(『珠洲市社会教育の手引—昭和35年度』より筆者作表)

住民への聞き取り調査によれば、五穀豊穡や大漁への感謝の意味を込めた酒の振舞いに対し、「いくら生活改善って婦人会が言っても、男性の方とかお祭りだけとかあ、たくさん飲むという、そんな機会もなかったから…そんだけ婦人会に言われても、全体が聞くてそんなものでもなかったと思うの」(Bさん)というように、「一人一合まで」との制限を守った人はいなかった。

4) つまみ程度のもてなし(3品以内)

次にみるのが、ごっつおの品数の制限である。品数については「つまみ程度のもてなし(3品以内)」にせよとの自粛改善が要請された。

本来、本膳と二の膳で提供するごっつおを3品以内に制限されるということは、実質、二の膳での提供がないことを意味する。しかし、この要請について、聞き取り調査から見てきたのは、当時、11品におよぶ品数で提供していたという事実である。一の膳には、赤飯、吸い物、お煮しめ(煮物)を乗せたおへら、お平、刺身、焼物、茶碗蒸し、酢の物の8膳が配膳されていた。子供用の膳では、お平に変えて饅頭を配膳する家庭も多かった。甘いものを食べる機会が少ない時代、子どもを喜ばせる配慮からだという。また、二の膳には、昆布巻、羹あつもの、菓子椀の3膳を配膳した。合計で11種という割り切れない縁起の良い奇数の椀で食材を彩り、験を担いだと地域住民らは口を揃える。

この品数を揃えるために、主婦の工夫は欠かせなかった。昭和20年代から30年代は、どの家庭にも冷蔵庫が無かった。食べ物が腐敗しやすい秋祭りの時期、氷室に保管していた食材を使って、ごっつお作りを乗り切ったとBさんは語る。

11品のごっつお以外にも、客人が帰る際に持たせる「コブタ」と呼ばれる手土産においても、季節の果物を3品あるいは5品と奇数で持たせるのが恒例であったという。

5. まとめ

1) アイデンティティとしての行事食

ごっつおに関する4項目の自粛改善に関しては、人々は、不同意や、無視という行動をとったことが、調査の結果から分かった。本研究が設定した「ごっつおとは、人びとの共通の象徴シンボルであり、自己のアイデンティティを確認する機能があるのではないか。」との仮説に対しては、赤飯や煮しめ、酒といったごっつおが、住民の象徴シンボルとなって機能していたことは間違いない。そして、地域住民のアイデンティティを確認する機能を持ったとするならば、ごっつおで確認されるアイデンティティとは何か、再考したい。

まず、自治体が祭礼の自粛要請の過程で目指したものは、農村婦人の労務負担の軽減からの冗費の節約であった。しかし、地域住民が、祭礼の自粛改善と対峙した背景には、ごっつおを介して、地域の紐帯・慣習を保持する意思決定があった。それが、エリクソンが定義した、1点めの定義である「自分が地域から承認されていることの確信」である。ごっつおを介し、自己の地域集団への同一化、すなわち、地域アイデンティティとして、ごっつおが機能していたと言ってよい。したがって、地域住民としての資格の再確認として、ごっつおが機能したと考えられる。

2) ジェンダーアイデンティティの創発

但し、地域アイデンティティとして機能した行事食「ごっつお」の研究からは、もう1つ、アイデンティティが確認された。それが、ジェンダーアイデンティティである。

地域住民の男性に、「あなたにとって、ごっつおとは何か」との聞き取り調査をしたところ、「茶碗蒸し。楽しみで嬉しくて嬉しくて」(Gさん)、「えびす(筆者注:卵の寒天)を食べるのが楽しみで」(Hさん)のようにモノがない時代の象徴^{シンボル}としての料理名を回答したケースが多々あった。

他方、地域住民の女性に同じ質問をしたところ、自身のごっつおとの向き合い方を答えたケースが見受けられた。例えば、「女の料理、お婆さんみたいに出来んけど、お婆さんと協力してたから、腕の見せ所っていうことはないけど、家族みんなして絆、親戚一同の絆っていうところかな。」(Iさん)や、「ごっつおとは、もてなし。もてなしとは女の態^{てい}やね」(Bさん)といった反応である。

つまり、当時、「牛馬のように働いている」と称されたように、牛馬の如く働いてのみ可視化されてきた農村女性は、「婦人」「女性」としては日々、不可視化されてきた。しかし、一転、「ごっつお」を作り続けた行為では、「女の態^{てい}」すなわち、1人の人間としての役割を見い出した。それが、エリクソンが2点目の定義とした「自分が他者から承認され受け入れられているという確信」である。ここに、ジェンダーとしての母や妻としての自己が創発されたのであり、女性として可視化されたのである。

6. おわりに

本研究では昭和20年代から30年代の祭礼における行事食「ごっつお」の実施状況を、政府主導の「生活改善普及事業」における祭礼自粛要請との影響関係から分析することにより、戦後の地域住民のアイデンティティおよび地方文化形成プロセスを明らかにした。

戦後、新たな社会文化形成の模索が行われた日本各地では、政府主導により伝統的生活様式の改善指導が行われてきたが、住民は冠婚葬祭の改善に比べ、祭礼の自粛要請に関しては必ずしも遵守したわけではなく、むしろ継承の立場を取った。その際、住民からは、2つアイデンティティの表出が確認された。それが、地域アイデンティティと、ジェンダーアイデンティティである。

人々のアイデンティティの確認要求としてのごっつおは、互いに同一のアイデンティティを有すると信じている地域住民、女性たちの連帯感をもたらした。そして、集団の統合に貢献し、祭礼の自粛改善はしないという選択につながった。もし、祭りの自粛改善がなされたならば、集合的アイデンティティの1つを失っていたであろう。

本研究では、祭礼文化の継承における地域アイデンティティの意義を明らかにした。こんにち、日本各地における祭礼の衰退が顕著である。しかしながら、それらの復活のカギとは、アイデンティティとしての行事食にかかっていることが示唆された。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、公益財団法人アサヒグループ学術振興財団より研究助成を賜りましたことを心から感謝申し上げます。

参考文献

- エリク・H・エリクソン, 小此木啓吾 1973「自我同一性」誠信書房
神崎宣武. 2005『まつりの食文化』角川書店
今和次郎. 1990『家政論』(今和次郎集第6巻).ドメス出版
珠洲市教育委員会. 1957.『珠洲市社会教育の手引 — 昭和32年度』
珠洲市教育委員会. 1960.『珠洲市社会教育の手引 — 昭和35年度』